

パンタロン——イヴ・サンローランの反逆のクラシック

『Stiletto』誌ディレクター ローレンス・ベナイム

LE PANTALON : UN CLASSIQUE REBELLE D'YVES SAINT LAURENT

Laurence BENAÏM, Director of the magazine Stiletto

Pantalon (pants) was named after *Pantalone*, an amorous and stingy character of an old man in Commedia dell'Arte in Italy. Even after George Sand, who dressed like a man, as well as Amelia Bloomer, who advocated innovation of clothing, people considered pants as obscene for a long time. There have been no other clothes that were so popular and yet equally regarded as taboo. Various fashion “revolutions” occurred concerning pants. Especially Yves Saint Laurent had made pants one of the classic items for women’s clothes. The pants style by Saint Laurent, which perplexes the women’s infantile attitudes represented by Mary Quant’s miniskirts, and symbolizes open seduction that opposes to Puritanism, is both masculine and feminine. It is due to Saint Laurent that pants have become one of the rebel classics that are able to change the atmosphere according to style just like a chameleon.

はじめに

「bénard」「culbutant」「fazar」「froc」「fural」「grimant」[すべてパンツの異称]。ファンシーなパンツ、スポーツ用パンツ、カシミア織(訳注1)のパンツ、余所行きのパンツ。バギー、スキニー、タイト、スリム。ジョドパーズ、ベルボトム、ロールアップ、スティラップ。中東のサルエル、インドのドーティ、朝鮮半島のパジ、日本の袴。パンタロン(=パンツ)は、自信たっぷりといったようすで世紀も文明も股にかけている。巻きつけるだけの形から始まり量産の既製服へといたるまで、波瀾に満ちた歴史に潜むさまざまな内幕をその皺や縫い目の中に秘める芯の強さ。厳しい気候に耐える中央アジアの人々もこれをはく。フン族、スキタイ人、アラン人といったステップの遊牧民が戦いの衣装に用いたことで、パンタロンは最初の段階を踏み出したのだ。ペルシア人やヒッタイト人もこの衣服を取り入れた。しかし、ギリシア人たちは、アレクサンダー大王を除いてこれを認めなかった。

ある衣服のタブーの歴史

「パンタロン」は不名誉なイメージを引きずっている。小アジアのビテュニアに聖パンタレオンという医師がいた。4世紀、彼は殉教したのだが、その後、ヴェネツィアの守護者、とりわけ船乗りと漁師の守護者になっていた。アグリッパ・ドービニエによれば、イタリアではこの名前はすぐさまヴェネツィア人のあだ名「パンタローネ」になる(『Confession catholique du sieur de Sancy』1660年)。パンタローネはコメディ・デラルテにおける登場人物の一人で、長ズボンをはき、「気が多く好色で浅ましい吝嗇家だが常に策略家の召使の標的になる老人」や「滑稽なほど偽善的な人物」(レ枢機卿『回想録』1717年)、はたまた「目的を果たすためにはどのような姿にもなりどのような役回りもこなす男」(『ア

カデミー・フランセーズ辞典』)である。

この痛風を患い、頻りに鼻をすすり、咳き込み、疾を吐く鉤鼻の老人が、世界でもっとも着られている衣服に自らの名を与えたのだ。けちで気取り屋。パンタローネは人一倍かつがれやすく、おまけに好き者である。そして、パンタロンといえば、人はそれに足を通し、身に着け、そして脱ぐ。学生時代にはお尻をすり減らすものだ。「付いてるものも付いていない」男性がいる一方で、「男勝りに」それをはく女性がいる。それは、アルフレッド・ド・ヴィニー曰く「外見、言葉遣い、声色、話の奔放さにおいて男性」だったジョルジュ・サンドから、自分の中に「理知的な男性と情熱的な女性の精神が特異にもひとつになっている」と感じたコレットまでさまざま。女性の乗馬服か、はたまた奇抜さを好む人の服か、長くパンタロンは節度を欠いたものとされてきた。たとえその着用を奨励した最初の人たちがアメリア・ブルーマーら公衆衛生の向上を図る婦人参政権論者だったとしても、である。体のラインを際立たせすぎるといっているので、さまざまな不都合が生じると考えられたようだ。「今日の若者は愚かにも大変ほっそりした筒状のものに自らの腿を収めるようになってしまった。それはあまりにも窮屈で、他の人がするようには体を自由に動かすことができない。」マッカール氏は『Encyclopédie méthodique de la médecine』(1798年)の「キュロット」の項で、こう嘆いた。それから200年後、ティーンエイジャーがぶかぶかにはくパンタロンは、それを吊るためのベルトがなかった囚人たちがモデルになっているといので、保守的なアメリカ人からは下品だとみなされている。

乗馬服を乗り越えて

これほどポピュラーでありながら、同じくタブーにまみれてもいる服は他にない。そして、ファッションの世界においてまさしく革命と呼べるような出来事がパンタロンと共に起こった。これらは、体を動かす不自由さからの脱却、身体の解放、さまざまな自由を求める動きの中で出てきたものだ。その中で、パンタロンという言葉を知ると常に連想する名前がある。リーバイス、ポワレ、シャネル、そしてパンタロンを女性のワードローブのクラシックなアイテムに変えたイヴ・サンローランだ。

1962年、パリ、スポンティニ通りに構えた自身のクチュール・メゾンのオープニングを飾るコレクションで、サンローランは、金ボタン付きのウール地のピー・ジャケットに合わせたパンタロンを発表した。あたかも自らがシャネルの後継者であると認知させるかのように。1967年にはランヴァンがクレープ地の「ズアーヴ・パンツ」を、ニナ・リッチが「キュロット・ドレス」を打ち出した。しかしながら、オートクチュールにおいて、男性テーラードのテクニックを広めた最初の人物は彼であり、それを最初にプレタポルテ向けに応用したのも彼だった。彼のプレタポルテ・ライン「リヴ・ゴーシュ」は1966年に始まる。

当時は〈イノセンス〉の時代であり、ダンス・パーティーが流行り始めた時代だった。そこに、誘惑の香りが宙に漂う。「1日を通じて街着としてはくのがいいですね。すべての女性がそれをはくとは限りませんが、同じくすべての女性がドレスを着るとは限りません」と、イヴ・サンローランはパンタロンについて語る。パンタロンが持つ両義性を擁護しているのだ。その両義性は、スモキングがもっともよ

く象徴している。英国のクラブの名高い喫煙室に集う男性たちの服装であったスモキングは、マレーネ・デートリッヒが着こなし、イヴ・サンローランによって自由奔放な女性たちのユニフォームになる。彼女たちはハンドバッグも持たず、旦那を引き連れることもせず、独りで夜の散歩をする。スモキングとは、イヴ・サンローランに「惚れ込んだ」すべての女性たちが身に着けるしなやかな鎧だ。このサンローランという男は女性の立場に身を置く術を知っていた。女性を理解し、気品ある存在へと引き上げ、彼女たちをヒロインに変身させる。

1968年、トランスパラントなシュミーズを合わせたイヴ・サンローランのパンツ・スーツは、〈II(彼)〉のスタイルが頂点にきたことを決定付けた。「私は男性のパンツ・スーツに匹敵するものを女性にも見つけたいのです。」戦後はまだレジャー向けでしかなかったパンタロンが、街に登場した。そして、新たな身のこなしが、新たな心構えが、身体への自信が生まれてくる。両脚を隠しはしたものの、心を解き放ったのだ。イヴ・サンローランによって、パンタロンはクラシックな女性服に、アナ・ウォルフのような自由闊達な女性たちが敬愛する服になった。アナ・ウォルフはドリス・レスリングの小説『黄金のノート』（1962年）のヒロイン。夫婦という社会制度に抗いながら、最後には「野菜を量るように自分の感情をあれこれ天秤にかける」移り気な男たちに身を任せてしまう。パンタロンはサファリ・ジャケットやピー・ジャケットと共犯関係にある。トゥールノン通りの旗艦店では30過ぎの女性たちが競ってそういったジャケットを求めているのだ。

ピューリタニズムに反して

マリー・クワントのミニ・スカートが子供のような女性という神話を温存する一方で、「リヴ・ゴージュ」のパンタロンはより多義的な形をとりながらそれを攪乱し、ピューリタニズムの規範に勇敢にも立ち向かう。イヴ・サンローランのパンタロンは必ずしも若者に似合うものではない。「20歳の女性はTシャツとジーンズしか求めません。彼女たちに風格が出てくるのは30歳を過ぎてからです。」

バスク海岸調のチュニック・パンツを着て、イヴ・サンローランのオートクチュールの顧客であるナン・ケンプナーがニューヨークのレストランにやってきた。しかし、彼女は、パンタロンをはいていることを理由に入店を断られてしまった。彼女は回想する。「だから私は脱いだの。チュニックをドレスとして着たわ。そしたら身をかがめることもできないから、ボーイがパンツを取ってくれることになったの。席に座っている間ずっとナプキンをひざの上にかけてなければならなかったわ。『これであなた方は満足なの?』って私は聞いてあげたの。」

イヴ・サンローランにおいて、快進撃は続く。インタビューにはほとんど応じなかったものの、クチュリエは、お気に入りのアイテムであるパンタロンを、開放的な誘惑を象徴するものへと変えた。イヴ・サンローランはこう主張する。「プレタポルテを通じて、私は男性が[女性よりも]大変自由に動くことができ、衣服にほとんど気を遣わなくてもよいことを知るようになりました。なぜならその格好はいつも一緒に安心だからです。『何を着たらいいのか?』というような悩みを毎年抱かなければならない女性に比べればずっと安心です。少しずつですが、私は男性のワードローブをそのまま移してきています。

結局、私には男性服に身を包んだ女性よりも美しいものはないのです！ なぜなら、そこでその人の女性らしさそのものが初めて問題になるからです。その後でもう一度男性服を着ることをせず、反旗を翻すのであれば、その人の女性らしさはよりいっそう花開くことでしょう。」

2つの顔を持ったヴィーナス

男性的で女性的なスタイルが生まれた。それは、現代的な品格をしっかりと主張している。米国版『ヴォーグ』は「あなたの新しい姿」と書き、『マリ・クレール』は「イヴ・サンローラン、直球のスタイル」と書き、『レクスプレス』は「2つの顔を持ったヴィーナス」と書いた。「すべての女性の中には女優が眠っています。それはジュリエットとメッサリナ（訳注2）を交互に演じることを密かに夢見ているのです。ロマンティックな乙女、誘惑する女、官能的な女性、両性具有、そして怪しいけれども近づくことのできない貴婦人までを一度にこなすことに憧れているのです。」レパトリーは際限がない。アルパカのバミューダ・パンツ。それにロレンザッチョ風の黒ベルベットのニッカ・ボッカーズ。これは1966年にジーン・シュリンプトンが着てギイ・ブルダンが撮影したロマンティックな服だ。ダンディ・ルックが街で流行る。火付け役は2人の女性で、以後、モード界における彼女たちの役割は大きくなる。ひとり『ジャルダン・デ・モード』の編集長、マイメ・アルノダン。フランスにおいてプレタポルテという考えを擁護した最初の人物。そして、彼女の盟友で当時「プリジュニック」のトレンド分析部門にいたドニーズ・ファイヨールだ。マイメ・アルノダンはそれまで自分のパンタロンを軍のテイラーに仕立ててもらっていた。彼女はYSLのパンツ・スーツをパリで身に着けた最初の女性の1人でもある。エレヌ・ラザレフですら部下の編集者たちがパンタロンをはくことを禁じていたのだが、最後にはこの社会現象について『エル』1968年8月26日号の論説欄で次のように書くことになった。「もっとも若いクチュリエながらトップを走るサンローランが新しいモードの調子と躍動、フォルムを生み出しました。彼の昼用や夜会用のパンツ・スーツは、年齢や体型にかかわらず大半の女性が身に着けることができますでしょう。心配する向きには回答としてベルト付きでフリンジのあるジャージーかシルクのチュニックを合わせることをお勧めします。これで安心できる女性らしい調子を出せます。この変革はバレンシアガのサック・ドレスや1947年のディオールのニュールックに匹敵する重要性を持つことでしょう。」

スタイルの魔力

秋、32歳のイヴ・サンローランはレノマのベストにティルバリーの靴、ガルドーニでオーダーしたベッ甲のメガネを着けていた。ニューヨークでアメリカ最初の「リヴ・ゴージュ」ブティックがオープンしたのだ。「イヴの名は魔力だ」9月25日の『タイム』誌はこう書き立てた。記事によると初日の売り上げは25,000ドル。ベストセラーは145ドルから175ドルの間で売られていた「シティ・パンツ」だった。

「パンツといえばイヴだ。」ローレン・バコールはこう言い放つ。シャネルのクリーム色のテーラードばかり着ている5番街の新たなポンパドールたちのありきたりのスタイルとは対照的だ。1968年10月、トゥールノン通りにあるサンローランのブティックでは2週間も経たずに150着ものアンサンブルが飛

ぶように売れていった。顧客の中にはエルザ・マルティネッリ、ステファーン・オードラン、ミレイユ・ダルク、そしてシネアストの妻、アンヌ＝マリー・マールがいた。彼女たちは皆、パンタロンに白いシルクのシャツを合わせ、メタルのバックルが付いたエナメルのパンプスをはき、金の長いネックレスを何連も着けていた……。すべてが細部に集まる。パンツの裾の折り返しは地面に届くぐらい低く下ろさなければならなかった。どんなに大股で歩いても踵がのぞく程度まで。『マリ・クレール』1968年12月号の見出しは「みんな一緒、でもそれぞれは違う」。クリスマスの夜、エレガントで有名なエレーヌ・ロシャは招待客にパンタロンをはいてくるよう依頼した。「パンタロンがきた!」。『ル・フィガロ』も1969年5月8日号で書いた。

40年余り後、パンタロンは「不名誉な」衣服ではなくなった。しかし、まったくのアウトローとして長い道のりをたどり続けている。イヴ・サンローランによって、この衣服は反逆のクラシックとなり、フラット・シューズをはくかハイヒールをはくかによってその雰囲気を変えるカメレオンのごときアイテムとなった。

(翻訳:石関亮)

<註>

1. 経に梳毛糸、緯に紡毛糸を使って、2/2の正則斜文に織り、かなり縮絨し、後は短く剪毛して仕上げたもの。背広、ズボン、スカートなどに使われる。(『増補版 服装大百科事典』文化出版局より)
2. ウァレリア・メッサリナ [20-48]。ローマ皇帝クラウディウスの皇妃。権勢欲が強く性的に奔放だったと伝えられており、夫である皇帝に対し企てた陰謀が発覚し、死罪となった。

ローレンス・ベナイム

ジャーナリスト、作家。『Stiletto』誌 (www.stiletto.fr) ディレクター。元『ル・モンド』紙ファッション欄担当。主著に『Yves Saint Laurent』(Grasset)、『Le pantalon : une histoire en marche』(L'Amateur)、『Issey Miyake』(Assouline) 『Grès』(Assouline) など。

(※肩書は掲載時のものです。)